

ルーマニアの特色や地域素材を生かした教育活動の工夫

— 中学部音楽科の授業実践より —

前ブカレスト日本人学校 教諭

北海道阿寒郡鶴居村立下幌呂小学校 教諭 吉川千穂

キーワード：現地理解、音楽科における現地素材の教材化

1. はじめに

ブカレスト日本人学校では「国際的な視野に立ち、主体的に行動する児童生徒の育成」を校内研修のテーマに掲げ、特色ある教育活動を行ってきた。ルーマニアの文化・風土、ルーマニア人やルーマニア人の生活、ルーマニアで働いている日本人など、現地の「人・もの・こと」を生かした活動を教育活動に意図的・計画的に組み入れることにより、より主体的に学習活動に関わり、ルーマニアと日本の共通点や相違点を理解し、それぞれの国のよさを感じる児童生徒を育成できると考え、教育活動の工夫に取り組んだ。

2. ブカレスト日本人学校について（2008年度現在）

昭和53年6月、在ルーマニア日本国大使館附属施設として設立され、2008年度に30周年を迎えた。

派遣教員は校長と教諭5名の計6名、現地採用スタッフは非常勤を含めて6名、ボランティア講師（派遣教員の配偶者）は2名である。全校児童生徒数は最大時29名で、平均20名前後である。小1から中3までの子どもたちが、まるで一つの家族のように仲良く学校生活を送っている。ルーマニアやタイ、韓国、イギリスなど約4割の保護者（両親または一方の親）が外国籍であり、非常に国際色豊かな環境である。

校舎は、モントリオール五輪で史上初の10点満点を出した金メダリスト、コマネチ選手が結婚式を挙げたと言われる教会のすぐそばにあり、民家（借用物件）を改造したものである。一般的な広い校舎とは異なるが、4つの普通教室の他、ホール、理科室、図書室兼パソコン室、音楽室、ブカリエ（昼食室兼調理室）、学習室（小部屋）などの特別教室もある。手狭ではあるが、校舎の裏手にはアスファルトの校庭がある。屋内体育館はなく、冬場は校庭にドームを設置し、そこで体育の授業や行事を行っている。

3. 地域素材を生かした教育活動の実践

学校全体の取り組みとしては、ブリティッシュスクールや現地校である17番学校、ブカレスト大学、ヒペリオン大学との交流、小1～中3までの少人数指導による英会話の授業、ルーマニア語会話やルーマニアダンスの体験、日本企業や青年海外協力隊など現地で活躍している日本人からの聞き取り学習等を行った。

個人研修としては、各教科での教材化を図った。中学年の社会科では、ブカレストの中心地を見学した。児童の生活が自家用車を使つてのDoor To Doorが基本となっていたため、公共の交通機関を使いチャウシェスクが贅限りを尽くした「国民の館」（ペンタゴンに次ぐ世界第2位の規模）、クレツレスク教会、旧共産党本部などを見学した。総合的な学習では、ルーマニアでよく食べられているシュニツェル作りに挑戦したり、ルーマニアに関するテーマで個人課題解決学習を行ったりした。中学部の音楽科では、オペラ調べを行ったりルーマニアの作曲家についての学習を行ったりした。低学年生活科では、学校付近の市場や広大な公園、日本大使館を学習の場として、カリキュラムの改訂を行った。特に専門分野が音楽であったこと、日本では小学校での経験が少なく、感性豊かな中学生との授業が貴重な経験になったことから、ここでは音楽科の実践を取り上げる。

4. 中学部音楽科「世界の音楽に親しもう ～ルーマニアの作曲家の音楽に親しもう～」

(1) 題材について

中学部音楽科の題材「世界の音楽に親しもう」として、ルーマニアの代表的な作曲家2人の作品を扱った。一曲目はジョルジュ・エネスク（1881～1955）の「ルーマニア狂詩曲第1番」、二曲目はチプリアン・ポルムベスク（1854～1883）の「望郷のバラード」である。本校にはルーマニア国籍の生徒もいるが、日本ではもちろん長年ルーマニアで生活していたとしても、自ら興味をもたない限りなかなか出会うことがない作品である。

「ルーマニア狂詩曲第1番」（1901～1902年）はエネスクの初期の作品で、「ルーマニア狂詩曲第2番」と共に最も有名な作品とされている。ロマン主義音楽の伝統にたち華麗で色彩的な作風をとっており、わかりやすい作品になっている。後半を中心にルーマニアの民族音楽を感じさせる特徴的なメロディーが奏でられている。また、この年は二年に一度の「ジョルジュ・エネスク音楽祭」が開催された年でもあり、エネスクに興味をもつきっかけになればと考えた。

「望郷のバラード」は、毎年のようにルーマニアを訪れ、本校でも演奏した経歴をもつヴァイオリニスト天満敦子さんによって1993年に初演されて以来、日本でも親しまれている。重く哀愁漂うメロディーから、故郷と家族、愛する人を偲ぶ作曲者の気持ちが感じられる楽曲である。

(2) 作曲家と作品について

①ジョルジュ・エネスク（George Enescu）について

（フランス語表記ではGeorge Enesco ジョルジュ・エネスコ、英語表記ではGeorge Enescu ジョージ・エネスク）

- ・ルーマニアのヴァイオリン奏者、作曲家、指揮者、教育者。ピアノ、チェロ、オルガンも堪能でもあった。
- ・彼の「エネスコ・ヴィブラート」と言われる音色は、幅広く豊かである。「温かく情熱的で、時々背景にしわがれ声が聞こえ、どこか哀しく奇妙な動きがある。」とも言われている。
- ・ベートーヴェンやシューマンのソナタ、バッハの無伴奏作品は、実演・録音と共に伝説的な名演として語られている。
- ・エネスクはフランスとルーマニアに暮らしたが、第2次世界大戦後、ルーマニアが共産主義になってからはパリに行き、二度と祖国に戻らなかった。
- ・ヴァイオリンをヨゼフ・ヘルメスベルガー、ジョセフ・ホワイト、マルタン・ピエール・マルシックに、作曲をロベルト・フックス、ジュール・マスナー、フォーレに習った。その他に、ラヴェルとも親交があり、ウィーンの演奏会ではブラームスとも面談し激励された。

<エネスクの作品の一例>

- ・ルーマニア狂詩曲（ルーマニア・ラプソディー）（第1番、第2番） ・管弦楽組曲（第1番～第3番）
- ・オペラ「エディプス王」（悲劇） ・ヴァイオリン協奏曲 ・ピアノ協奏曲
- ・ヴァイオリンソナタ（第1番～第3番） その他管弦楽、協奏曲、ピアノ曲、合唱曲、オペラなど多数あり

②チプリアン・ポルムベスク（Ciprian Porumbescu）について

- ・ルーマニアを代表する作曲家。
- ・いろいろな面で才能があり、詩、歌のテキスト、台本、新聞記事、音楽の教科書などを作った。国の独立にも貢献した。
- ・作品は、歌を含めて250曲。合唱やオペレッタが多かった。
- ・子供の頃は、農夫の伝統的な歌を聴いて育った。

- ・彼は作品に、昔の有名な英雄や軍隊のリーダー（Stefan Cel Mare王）など、古くから伝えられた事を取り入れていた。
- ・彼は愛国者であり、作品からも愛国心が伝わってくる。
- ・ルーマニア主義（民族運動）を、音楽活動を通して実現しようとした。
- ・純情で熱血漢でもあった彼は、オーストリア＝ハンガリー帝国に支配されていた母国ルーマニアの独立運動に参加した。ルーマニア学生協会「アルボロアサ」の議長も務め、これが当時の支配者オーストリア当局に反体制派として目をつけられ、のちに逮捕・投獄となる。また、投獄中に肺病（結核）になる。
- ・宗教的理由から結婚できなかった恋人ベルタと会うために、風雪の山越えを繰り返し、病勢を悪化させた物語も、ルーマニアではよく知られた「ポルムベスク伝説」である。

<ポルムベスクの作品「望郷のバラード」について>

- ・作曲時期については様々な説がある：
 - ①一人でステツプカという場所において1週間で作曲した。
 - ②逮捕され、投獄中に故郷をしのび恋人に思いをはせながら書き上げた。
 - ③ウィーンにいた頃に作られた。
- ・ロマンチックでノスタルジック（故郷を懐かしみ恋しがる）な曲。
- ・この曲は、詩的で悲しさ、光と影、ルーマニアの伝統的音楽Doina、古い歌が融合されている。
- ・ルーマニアでは代表的なヴァイオリン曲として広く知られるようになった。

○国外では知られることの少ない秘曲「バラダ」が、日本へ渡ったのは…

- ・1977年冬、ウィーンの日本大使館に勤めていた外交官が、ルーマニアからの亡命音楽家に会おう。音楽家はチャウシェスク政権に追われ、母国に家族を残して一人の生活を送っていた。毎日故郷をしのいで、母国ルーマニアの曲を弾いていた。
- ・1985年チューリッヒで二人は再会する。音楽家は外交官に黄ばんだ1枚の楽譜を渡す。「この曲が初めてお会いした夜、私が弾き、あなたが感動して楽屋におたずねくださった秘曲『バラダ』です。100年くらい前に書かれた音楽ですが、私は亡命以来、この譜面を手放したことがありません。楽しかった一日の思い出に、あなたに差し上げますから、時折音にだして、私のことを思い出していただけませんか。もし、この曲を弾くにふさわしいヴァイオリニストを見つけることが出来て、見ることかなわぬあなたの母国で演奏していただけると嬉しいのですが。」と語った。
- ・1992年、外交官は、偶然ブカレストでのコンサートで天満敦子に出会う。
- ・1993年、天満敦子により「望郷のバラード」が日本で初演。CDは5万枚以上を売るロングセラーとなる。没後100年の年月を経て、よみがえりを果たした。(CD「BALADA」の中野雄氏のライナーノーツより引用)

(3) 研究授業について

①題材名 「世界の音楽に親しもう ～ルーマニアの作曲家の音楽に親しもう～」

②題材の目標

ルーマニアの代表的な作曲家や楽曲について知識を深めたり、ルーマニアの音楽の特徴や作者の思いを感じ取ったりしながら鑑賞することができる。

③本時について

○本時の目標

ポルムベスクや作品について関心を持ち、作曲者の気持ちを想像したり曲の感じを味わったりしながら「望

郷のバラード」を鑑賞することができる。

○本時の展開 (2 / 2)

学習活動・学習内容	指導上の留意点	評価規準
<p>1 前時を振り返る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジョルジュ・エネスクの「ルーマニア狂詩曲第1番」には、ルーマニアらしいメロディーが入っていた。 <p>2 課題を確認する</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>ポルムベスクについて知り、作曲者の気持ちを想像しながら作品を味わおう。</p> </div> <p>3 各自が調べてきた情報を交流する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポルムベスクは29歳の若さで亡くなった。 ・オーストリア・ハンガリー帝国の支配下にあった故国の独立運動に参加し、政治犯として捕まった。 ・日本では「望郷のバラード」が有名で、1993年に天満敦子さんによって初演された。 ・故郷と家族、愛する人を偲んで作られた曲である。投獄中の作品とも言われる。 <p>4 作者の思いを想像しながら「望郷のバラード」を聴き、感じたことを交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・故郷を思う気持ちが、重いメロディーで表れている。 ・作曲者の悲しさや切なさが伝わる音楽である。 ・投獄中に書かれたという感じがする。 <p>5 天満さんの演奏を聴き、感想を交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オルガンの伴奏で、感じが違う。 ・作曲者の思いを伝えているようだ。 	<p>・個人で調べた情報を交流させることにより、多面的に作曲者や楽曲についての知識を増やしながら、関心をもたせるようにする。</p> <p>・作品を作った時のポルムベスクのおかれていた状況を知った上で鑑賞することにより、作曲者の気持ちに共感できるようにする。</p> <p>・天満さんの演奏を聴き、さらに楽曲を味わえるようにする。また、演奏会への意欲づけを図る。</p>	<p><関1> ポルムベスクの人生や、日本でも知られるようになった「望郷のバラード」について関心をもつことができる。 (行動観察・ワークシート)</p> <p><感2> 「望郷のバラード」から作曲者の思いを感じることができる。 (ワークシート)</p> <p><鑑2> ポルムベスクの故郷を思う気持ちを想像したり、曲想を感じ取ったりしながら聴くことができる。 (行動観察・ワークシート)</p>

5. 成果と課題について

成果としては、ルーマニアの作曲家の作品ということで、何よりも生徒の興味・関心が高まった。事前に生徒一人一人がルーマニアの作曲家について下調べをし、その作曲家の人生や背景をある程度知った上で鑑賞していたので、学習に対して意欲的かつより深い考察ができていたと思う。「作者の思い」と「曲想、曲の構成」の2つの視点をもって鑑賞させたいというねらいは、充分達成されていた。また、この曲が日本で知られるようになったきっかけを作り、本校で何度もなく生演奏をしていただいている天満敦子さんの演奏を聴かせたことは、演奏する人によって音色が変わることを感じさせるだけではなく、まさにルーマニアと日本の絆を感じさせるものであった。教材自体が素晴らしいので、子供達が自分の思いを話し、聴き、深めていく授業ができた。

課題としては、作曲者が生きていた時代背景にもっと触れられたら、その時の作曲者の心情にさらにもう一步迫ることができたと思う。また、2作品の鑑賞後、ポルムベスクとエネスクの共通点や相違点をまとめてもよかった。二人の作曲者を比べる事で、ルーマニアのよさを捉えることもできたからだ。

天満さんの「望郷のバラード」の生演奏を、目を閉じて心の底から味わっていた生徒がいた。この授業をきっかけに、エネスク音楽祭がブカレストにおいて隔年で行われ、今年がその年であることを知ったルーマニア人生徒がいた。この授業がルーマニアの音楽に興味をもつきっかけになったことは確かである。エネスク国際音楽祭のポスターが街中に貼られ、天満敦子さんの生演奏をアテネ音楽堂で聴くことができたこの年に、授業実践ができたことは大変意義深いものだったと感じている。